

普通高校での職業に関する教育

和光高校での実践から

森下一期

1 高校教育の目的としての「専門教育」

青年たちの働きについてさまざまな困難が語られている。フリーター、ニート、非正規雇用等々、さまざまに論議されている。そのような中で高校生は先の見通しももてず、自分がこれから入っていくだろう仕事、労働、職業に期待や展望が得られずにいる。リストラ、失業のおそれを抱いて自信を失っている大人の姿を見るにつけ、働くことが遠のいていくように高校生たちは感じているようである。しかし、それはマスコミで報道される間接的な情報を得るしかないために生ずることと考えられる。実際、働く人に直接インタビューし、働きがいや生きがい聞き取ると、少なからぬ生徒がそれまでの悲観的な職業観が明るなものへと転換する書き表す。

だから、意図的に働くことを見る場を設けることは、青年期の教育においては欠かしてはならないものである。にもかかわらず、高等学校は職業や専門の教育をないがしろにしてきた。学校教育法は高等学校の目的として「高等普通教育ならびに専門教育を施す」としているが、職業（専門）高校においては普通教科と専門教科の学習を単位数も指定して同時に学ぶことを義務づけているながら、普通科においては「設置することが望ましい」とどこまっついていて、職業や専門の科目を設置している学校はわずかである。そして、二〇〇六年には七二・五%の生徒が普通科で学んでいるのだから、圧倒的な高校生が将来の進路選択ができる力を養うべき高等学校で、職業や専

門の実験を体験したり学んでいないのである。

このような現状を踏まえると、現代の高等学校においては、普通科においておこなうべき、職業に関する教育

まっついで、職業や専門の科目を設置している学校はわずかである。そして、二〇〇六年には七二・五%の生徒が普通科で学んでいるのだから、圧倒的な高校生が将来の進路選択ができる力を養うべき高等学校で、職業や専

門の實際を体験したり学んでいないのである。

このような現状を踏まえると、現代の高等学校においては、普通科においておこなうべき、職業に関する教育を創り出していくことが焦眉の課題となると言わざるを得ない。その中では、現実にある厳しき、施策の遅れ、要求しつづけなければならないことについても教えていかなければならないのは当然である。ところが、普通科における職業・専門の教育を意図的に創造していくとくりくみは寡聞にして聞かない。

私たちのとりくみはささやかなものである。だが、それなりの仮説をもつてとりくみ、少なくとも現代の高校生が求める学習・活動を展開できているのではないかと考えている。

2 和光高校における技術・職業の教育の経緯

和光高校（東京・町田市）では、一九七八年のカリキュラムから、技術教育に関する選択科目「機械工学、電気・電子工学」を設置してきている。その後、一九九一年度から、フィールドワークを含む選択科目の一つに、「現代社会と技術」を設けた。近代社会の技術の発展をふまえながら、生徒たちが職業に目を向け、考えることをねらいとしてきた。

そして、一九九四年カリキュラムで、あらためて「普通教育における職業教育」を組み込んだ。すでに設けていた現代的な課題をとり上げる「総合学習」の中に「仕事、職業」を位置づけ、新たに三年の必修選択として「専門教育科目群」を設けた。実施に先立ち、一九九五年には後者について生徒にアンケートをとったが、圧倒的多数の生徒がこの選択科目を歓迎していた。二〇〇〇年度に生徒たちにアンケートをとったが、とても良い、良いをあわせると八一・五%の生徒が歓迎していた。社会人講師を多く招き実践している「専門教育科目群」は和光高校の職業・技術教育の柱となるところだが、これについては他の機会を待つこととして、ここでは、一四

年余続いている「現代社会と技術」の実践の意味と意義を考えてみたい。(現在は担当者・名称は変わっている)

3 働く人にインタビューをする 生徒は言う、仕事に対する価値観が変わった

この科目では、生徒に職業に目を向けさせることをねらっているので、現に働いている人々にインタビューするとりくみをしている。一学期に二回、インタビューに出かけさせた。まず、インタビューする人を自分で探し、約束を取りつけるわけである。アポイントメントを取ることでも大事な学びだということも強調している。最初はインタビュー集でインタビューのまとめ方を学ぶ。

次に、インタビューを文章にまとめさせ、B4判用紙表裏に印刷して全員に配布し、読んだ上で、作者に向けてコメントを書くようにしている。一〇枚、二〇枚に目をとおし、コメントを書くわけだから、なかなか大変である。一時は、ひたすら書いている鉛筆の音しかしていないという場面も出てくる。

ある生徒は次のようにインタビューにとりくんだ感想を書いている。

「……電話でアポをとる時も、実際にインタビューする時もすごく緊張した。三〇分くらいで早々と終わらせようと思っていたのに四時間もお話ができた。長かったけれど、終わったら何だか心がホカホカと温かい感じがして、いい気分が家に帰った。……インタビュー後の大きな充実感……。その人の秘密を握ったような気がして、おもちゃを独り占めした小さい子のようにニマニマしてしまう。なぜ充実感を得られるのかなと考えたら、その人のこれまでの人生を自分のこれからの人生に生かせるかも！と思うからだ、と気づいた。今の私は、……将来になりたいなあと思う職業もあるけれど、……本当になれるのかなという不安などでいっぱい。でもインタビューをすることでその行き場のない不安が少し落ち着く気がする。……」(Y・N)

このように働いている人に直接接し、インタビューすることが生徒に大きな影響を与えることがわかる。地域

での遊びや生活が少なくなり、学校化したと言われる社会の中で、子どもたちはもっぱら家と学校の行き来に終わっていて、身近な親以外の大人と出会うことも少なく、ましてや面と向かって話し、聞き出すといったことは

ビューをすることでその行き場の不安が少し落ち着く気がする。……」(Y・N)

このように働いている人に直接接し、インタビューすることが生徒に大きな影響を与えることがわかる。地域での遊びや生活が少なくなり、学校化したと言われる社会の中で、子どもたちはもっぱら家と学校の行き来に終わっていて、身近な親以外の大人と出会うことも少なく、ましてや面と向かって話し、聞き出すといったことはまずないといえるだろう。考えてみればこんな不幸なことはない。子どもが学ぶのは、本来生活の中であつて、学校はそのほんの一部にすぎないはずである。彼や彼女の周りの大人は悪い部分も含めて教師であるはずである。そこから学ばない手はないのに、子どもたちはそこから遮断されてゆたかな学びを剥奪はくたつされているというわけである。

Y・Nさんも触れているが、生徒は仕事や職業にあこがれや期待を強くもつというよりも不安や疑いをもっている。次の生徒が、それをよく表している。

「こんな時代だから自分の好きな仕事をしている人なんて少ないだろうと思つていた。もつといやいや仕事をしている人が多くて、お金のために仕事をしているという人がいると思つていた。でも、それは私の大きな勘違いであることがインタビューをしてみて、他の人のを読んでみてわかつた。……仕事を選んだ理由に『好きだから』とか『興味があるから』とあげる人が多かつた。このようなことから私の中の仕事に対する価値観が変わつた。……もし自分の夢や希望が破れたとしても、新たな仕事で誇りをもつことも可能であつて、一生に就く仕事も一つだけでなく、向いていないのなら転職したりするのも良いことだと知つた。インタビューをする前の私は仕事に対してマイナスのイメージばかりをもつていた。でも、それは私が周りの働く大人たちをよく見ていなかっただけで本当は多くの人々が仕事に誇りをもつているのだ」(G・A)

このような感想はかなり多くの生徒がもっている。直接、働いている大人と接することは、現代のように先の展望がもてない時だからこそ、不安に駆られて子ども・青年が必死にとりくんでいる大人とかかわりをもち、事柄と一緒に考えていくといったとりくみが欠かせないと言えるのではないだろうか。

4 研究旅行

夏休みの課題としてはアルバイトかボランティアの体験記を課し、一〇月にこの授業の受講者で三泊四日の研究旅行に行く。行程は——トヨタ自動車、オークヴィレッジ、野麦峠、歴史の里、蚕糸博物館、宮坂製糸、東芝青梅工場など——一学期に行っていたインタビューと関連させて、働く人にインタビューをさせてもらうよう依頼し、木工製作者集団オークヴィレッジ、宮坂製糸では、快く引き受けていただき継続してできている。

(1) 研究旅行の構想

研究旅行は現代の機械制大工業と前近代的な軽工業とを比較し、そこでの労働を考えることを目的に企画した。最も現代的なトヨタ自動車の組み立てライン、東芝青梅工場のパソコンの組み立てラインを一つの極とし、対極に製糸工場を置くこととした。

問題は、受け入れてくれる製糸工場を探すことだった。製糸工場の見学を生徒にさせたいと考えたのは、日本の工場労働の原点は製糸・紡績であり、女性労働、児童労働であるので、そこに目を向けさせたいと考えたからである。中でも、外貨を獲得した製糸が日本の近代化を考える上での原点であることとらえていた。この構想の中では、ぜひとも「野麦峠」の旧街道を生徒と一緒に歩いて考え合いたいということも含まれていた。

(2) 宮坂製糸さんのこと

長野県岡谷市役所に教えてもらって電話をした宮坂製糸さんに見学を受け入れていただくことになったのだが、それが、結局岡谷で唯一の製糸工場になるとはその時は知るよしもなかった。関税も撤廃され、一層深刻化

した繊維不況の中で、その当時あった他の三つの工場は次々と閉鎖せざるを得ない状況に追い込まれたのである。

長野県岡谷市役所に教えてもらって電話をした宮坂製糸さんに見学を受け入れていただくことになったのだが、それが、結局岡谷で唯一の製糸工場になるとはその時は知るよしもなかった。関税も撤廃され、一層深刻化

した繊維不況の中で、その当時あった他の三つの工場は次々と閉鎖せざるを得ない状況に追い込まれたのである。

なぜ、宮坂さんのところだけが未だに続いているのだろうか。宮坂製糸工場は、手つむぎの諏訪式座繰りを一部残していた。だから、あの「あ、野麦峠」で見る工女が手で紡いでいる姿を見ることができるのである。

一〇年ほどたつて、宮坂さんにお聞きしたのだが、昭和三〇年代末に、自動製糸機に入れ替える動きが出て、ほとんどの工場は全面的に入れ替えたということだ。それに対し、宮坂製糸では、糸の検査をする時に座繰機の方が簡単にできるということと、それまで座繰機でやっていたおばさんたちの働く場を全部なくすことはどうだろうか、ということ、一部を撤去せずに残して来たという。

機械製糸は中国などの糸に値段の上で太刀打ちできず、宮坂さんでも一時は機械は止める事態になっている。ただ、手つむぎの方は、一定の顧客もあり継続することができた。宮坂さんは手つむぎにこそ生き残りの道を見だし、それまで見向きもされなかった玉繭を使った上州座繰りの導入も図っていた。

(3) 生徒は何を感じたか

さて、この研究旅行の中で生徒たちは何を感じ、何をつかんでいくだろうか。

第一回目の時、ある生徒は次のような感想を書いていた。

「僕はあの経営しているおじさん（宮坂さん）にとっても魅力を感じた。僕がひかれたのはあのことばでは言い表せない笑顔だった。東芝の説明してくれたおじさんの笑顔には、今ほとんど進出している東芝のバックがあつて誇り高げな感じだった。製糸工場のおじさんに会っていなければこんな印象は受けなかったと思う。製糸業がどんどん低下していつてる中で、焦りも感じられなかったし、あきらめも感じられなかった。悲しみはあると思うけれどそれほど深くは感じられなかった。結局あの目は何だったんだろうと思つた。なんていつたらいいのかわからないけれど、近代の工場では絶対に出会えないもので、昔ながらの製糸業、そしておばさんたちの雰囲気、

仕事の雰囲気から生まれるのだなと思った。それとどうせ仕事をするなら、そんな雰囲気の中であんな目になれるようなところで働きたいと思った」(K・K)

こうやって一〇年を経て、宮坂さんのとりくみ、努力を見てくると、K・K君は見事に宮坂さんをとらえていたということがわかる。七年目のある生徒は、宮坂さんに会つての感動を次のように述べている。

「だけど、やっぱり一番心に残つてゐるのつて、宮坂製糸工場だつた。……おばあちゃんが一生懸命に蚕の糸をつむいでいて、なんかえらいなつて思つた。……一生懸命さが伝わつてきた。……班にわかれて、働いている人の話を聞くことになつた。私の班は宮坂さんだつた。なんか話を聞いていたら、つい涙がいっぱいこもつてた。それは宮坂さんの話している内容が、私を感動や悲しみの渦に巻き込んでいったのだ。これは宮坂さんが説明したからだと思う。宮坂さんのあの優しい気持ち。そして、あせらずマイペースで、しっかりと自分をもつていたと思つた。だけど、つらいこととかあまりないつて言つた宮坂さんには、働く人がいるからだと思つた。『みんながたのしく、元気で仕事をしていたら、私にとつてとつてもうれいことだ』つて言つていた宮坂さん。とつても心のあつたかい人だと思つた。製糸工場なんてめつたにないし、かなりのいきおいでピンチをまねいてると思つたけど、それは本人もわかつていたけど、弱音をはくわけでもなく、さすがこの仕事をやるだけの人だと思つた。インタビュールしているときも、ニコニコ笑つてくれて、逆に私には、それがとつてもつらかつた。だけど、本当にガンバツてほしいし、まけないでほしい。宮坂さんのことだから、まけないと思うし、働いてる人もみんなまで助けあつて製糸工場を続けてほしい。なんか自分もこのとき、とつてもあつたかい気持ちになれた。だから『くさい』とか言つてしまつたこと本当に悪いと思つてます。私にとつて、研究旅行の中で一番思い出になつたと思つています」(F・T)

二〇二年度の生徒も宮坂製糸の見学とインタビュールをおして現代の産業について考察している。製糸業のおかれている現状が、生徒に思考をうながしていると言えらるう。

(4)なぜ宮坂製糸が生徒を惹きつけるのか

二〇〇二年度の生徒も宮坂製糸の見学とインタビューをとおして現代の産業について考察している。製糸業のおかれている現状が、生徒に思考をうながしていると言えるだろう。

(4)なぜ宮坂製糸が生徒を惹きつけるのか

このように、宮坂製糸が研究旅行の中心となりうるには、いくつかの要因があると思っている。第一は、旅行全体をそこを軸に組んだことだろう。そのように「組んだ」ことの中味は紙数の関係で割愛する。だが、生徒はそういった教師が組んだことにそんなに簡単に簡単にのるものではない。そこに、生徒を惹きつけるものがなければ感動は生まれない。やはり宮坂製糸そのものが生徒を惹きつけるのだろう。

それは、七〇歳、八〇歳のおばあさんが現役で働いていることである。トヨタ自動車やオークヴィレッジではせいぜい四〇〜五〇代までの人たちの姿を見てきた。生徒たちにとつてあたり前の光景だろう。でも、宮坂製糸では、エツと思つたのではないだろうか。老人は家にいるもの、といった観念からは、宮坂製糸のおばあちゃんたちの姿は想像できない。そのおばあちゃんたちが、働く生きがいと喜びを語るのだから、これまでの観念を揺さぶられたのではないだろうか。これが宮坂製糸に惹きつけられる第二の理由のように思う。

そして、第三は、初年度にK君が見抜いていたように、宮坂さんの日本の製糸業とともに生きようとする姿だろう。K君はそこに、たたかいではなく静かな願いを感じたのではないだろうか。企業でありながら、伝統工芸を守り育てようとする姿を感じたのではないかと思う。彼がいみじくも書いているように宮坂さんの「笑顔」にそれを感じさせるものがあるのである。でも、それは単に見た目の「笑顔」ではなく、宮坂さんが大事にしてきた「働くおばあさんたちの喜び」と「日本の製糸業」に裏打ちされた重みをもったものだった。その「笑顔」こそが生徒たちを惹きつけて離さなかつたのではないだろうか。

5 「現代社会と技術」の授業とは

研究旅行を終えて、一年間のまとめを最低四〇〇字原稿用紙一五枚以上のレポートか一〇分程度のビデオ作品の制作を課して、その概要を発表して授業は終わりとなる。

以上の授業の流れのように、ほとんど講義はしない。生徒に自己運動をおこさせることこそが必要だと考え、仕事をもっている人に直接かかわる場を設け、そこに首を突っ込ませるという働きかけをおこなっているのである。

だから、生徒たちは自分で学んでいく。もちろん授業の課題だ、ということはあるだろうが、そのとりくみを見ると、いわゆる授業の課題として仕方なくとりくんだ、という域を大きく超えたものが少なからずある。たしかに初発は授業の課題だが、やっている内に自分の世界となっていくように思われる。楽しんでいっていると言っているのではないだろうか。3で紹介したY・Nさんは、夏のアルバイト・ボランティアの課題では、合唱団の先生の付き人を数日間させてもらい体験記をまとめていて、なんとB4判の用紙三六枚にびっしり書いている。夏休みの後半はその執筆に費やしたという。文も新しい経験、発見に躍動している。私には彼女は自分の世界をつくり、その中で遊びまくったのではないかと思った。一年間のまとめも、パンを調べ、近くのパン屋さんに何かボランティアをさせてもらい、自分の家でも焼いてみて、その作品を私にも試食させてくれた。

このように彼女がとりくむことはまったく想定できなかった。私たちが働きかける子どもたちは、その働きかけ方がその子どもにマッチすれば、その子ども自身の中で自己運動をおこし、真の学びが展開され、そしてこの授業では職業への接近がはかられたのではないかと考えている。